特集❸

インターンシップで地域が燃える

森本　純一
おむすび会メンバー
（内子町）

インターンシップで農作業のお手伝い。柿畑にて農家のひとたちと

大瀬川登（かわのぼり）地区の概況

内子町大瀬川登地区。私が生まれて育った地区です。約１００世帯があり行政区割で４つの地域があります。私が住んでいる地域は海抜４００メートルのところにある典型的な「中山間地域」です。

中山間地域の多くは、医療、教育、少子高齢化、農業後継者といった問題などを抱えていますが、川登地区も同様で、特に現在19戸が住んでいる私の地域では、いわゆる「限界集落」の要件を満たしつつあります。タクシーで病院へ行く独居の高齢者も増えてきました。

また、かつてこの地区には、川登小学校という小学校もありましたが、ずっと昔に廃校になりました。

そのときの小学校の建物は壊され、跡地は「公民館」となり、その横には僻地保育所が設置されていましたが、僻地保育所も12年前に閉所してしまいました。

田舎は身内以外はほとんど誰も来ないところ

そんな地域課題を抱える中で、川登地区では８年前に初めてインターンシップとして松山大学生を受け入れました。

その時は閉所された保育所の和室を学生たちと掃除して、網戸を張り替えて男子学生の宿泊所に、女子学生は公民館に宿泊という形での受け入れでした。希望する農家に任せて農業体験をするというプログラムでしたが、学生を受け入れた農家はお客扱いをするところもあり、実体験とはなかなか言い難く、大変だったと記憶しています。

交流からうまれたもの

次の年から愛媛大学農学部の調査セミナーをインターンシップとして受け入れ、07年末現在で延べ１２０人を超えました。回を重ねるうちに経験から生まれた知恵が蓄積されてきました。

学生たちがもつ力を、受け入れる側の地域がどうやって活かそうとしていくのかがとても重要ですので、まず農家が学生にして欲しい仕事の内容、学生がしたい仕事の内容、これのマッチングを学生に任せました。

また、私たちの地域では、学生を宿泊も含めて農家が受け入れたり、近くの遍路宿を利用して合宿形態で行ったり、布団が足りないので農家から金額を決めて借り上げたりするなど、なるべく地域全体で受け入れてきました。

そうした中で誕生したのが、食事の世話をする地区内のお母さんの組織「ピチトマト」です。この組織は平成17年に公民館の建て替えで誕生し

柿取り作業でのひとコマ

学生の一文字　Loveのつもり

た宿泊施設「いかだや」の組織「おむすび会」のルーツにもなりました。

ピチトマトでは、学生たちに地域の食材をつかった郷土料理を提供するほか、学生もまた日替わりの食事当番をつくって手伝ったりすることで、地域のお母さんたちと交流をしてきました。忙しいときはお弁当を作って畑まで配達して回ったこともあります。

そんな地域住民と学生との交流を重ねる中、あるとき学生から「なんでこんな不便な山の中に住んでいるのですか?」と質問された農家の方がいました。

その方は、返答に詰まってしまい、「ここに生まれてずっと住んでいるが、そんなことを一度も考えたことはなかった」と語りました。

学生たちとの会話は刺激的です。期間中には受け入れ農家と学生の懇親会も実施しています。意見交換は活発です。最後には涙もありました。

『いかだや』の誕生へ

川登地区は毎年4月の第四日曜日に川祭りで筏流しをしています。川を綺麗にしよう、地域の伝統技術を継承していこう、地域を元気にしようと頑張っています。当日は全戸が参加しての小田川の清掃作業から始まります。

そんな地域づくりをする上で核になる施設が、先述の「いかだや」です。

公民館の建て替えを計画する際に、住民の間から「風呂があれば学生も助かる、食事も大勢で出来たらええと思う」という声があがり、また宿泊施設には食事が必要ですが、先述のピチトマトのメンバーを中心に「おむすび会」が結成されて宿泊者の食事の手配をするようになったのです。

宿泊交流施設「いかだや」

このことは、これまで学生のインターンシップを受け入れてきた中での成果といえるかもしれません。

現在、インターンシップでやってきた学生たちは、毎年この「いかだや」で寝泊まりをして地域住民と交流しています。

継続から生まれるもの

インターンシップとはこうあるべきということはないと思いますが、学生を地域の身の丈で受け入れて初めてドラマができるというか、何かが生まれるような気がします。学生をお客さん扱いではなく、地域の一員として迎えるということでしょうか。

インターンシップでやってきた学生たちは、川祭りにもやって来てくれて餅つきの手伝いをしてくれています。

そして、「またおいで」の言葉が地域と学生の別れの言葉になっています。いつ戻って来てもらっても変わらないものを残す、これが来て頂いた人に返せる私たちの出来ることではないでしょうか。

自分の住んでいるところを何もない偏狭の地と嘆くのか、気づかなかった良いところを宝と誇るのか、学生たちが教えてくれました。今年もそろそろ川祭りの時期です。祭りの沢山の人ごみの中に何年か前の学生が新しい家族とともにまた来てくれるでしょうか。楽しみです。

■いかだやHP　http://www15.ocn.ne.jp/~ikadaya/index.htm